

日本バプテスト連盟

性差別問題特別委員会

# ニュースレター

第36号 2023. 10. 20

★日本バプテスト連盟のホームページでも読むことができます。



※写真については編集後記を参照

巻頭言：「医療の外に追い出される人々？」

中條 譲治

「男は側女をつかんで、外にいる彼らのもとに差し出した。」（士師記 19：25 協会共同訳）

医学は日進月歩に高度になり、多くの難病やしょうがいの原因が解明され、治療できるようになりました。そのために日々、努めている方たちの労は尊いものです。

しかし、実は、女性に対する医療に大きな課題があることも、つい最近、新聞で知りました（「毎日新聞」2023年9月25日）。見出しは、「心筋梗塞死亡率 女性は倍」というものです。心筋梗塞は、60代以上の男性が多く発症する病です。しかし、発症後の死亡率を男女で比べると、女性が男性の2倍位高いとのこと。ある研究機関がまとめた統計によると、入院から30日以内に死亡した割合は、男性が6.9%なのに対し、女性は12.4%であったそうです。それは、発症年齢の差（女性のほうが高齢になってから）なども考えられますが、症状の違いが大きな要因のようです。男性は主に胸の痛みを訴えますが、女性は背中やあご、のどの痛みなどの症状が見られることが多いようです。「心筋梗塞＝胸の痛み」という男性に多い症状が基準になっているので、女性が体調を悪くし病院に行っても発見と治療が遅れてしまい、救えた命を失うことにもなるのです。医療の技術は、凄まじい勢いで進歩していますが、それはまだまだ男性中心のものであることを思わされます。

上記の記事を読みつつ広告欄にも目を向けると、翻訳出版されたばかりのマリーケ・ビッグ著、『性差別の医学史』が紹介されていました。表紙には、「医療はいかに女性たちを見捨てて来たか」とあります。現代の医療法や薬の多くは、男性の身体のために男性が設計してきたものであり、それゆえ、心臓病の診断、鎮痛剤の処方仕方などで、いかに女性が医療的不利益を被っているか、ということでした。

この現代でも、女性が適正に医療を受けられていないという構造があることは驚きです。更に、このような「人間＝男性」という無自覚な前提は、女性を差別するだけではなく、インターセックス（身体的性が男性・女性のどちらとも一致しない）はじめ様々なセクシュアルマイノリティを医療の恩恵の外へと追い出すことに繋がることも覚えていたいと思います。

（ちゅうじょう じょうじ／性差別問題特別委員会委員 長住バプテスト教会）

## 「排除は格好悪い」

今井 朋恵

先日、福岡での合同学習会に 40 名が集い、分団で語り合いました。私の発題は「当たり前の中に潜む性差別」でした。人権に関わるのは、消すことが出来ない差別を語り、それらを繰り返さない為です。元ハンセン病の方々との交流を通し、人間として生きられない苦痛と絶望、人権が守られない社会の恐怖を思います。生涯息を潜め園の中で生きることを強いられた人々、断種の強制・解剖の承諾・牢で凍死や餓死者が出た園も、戻れない故郷、死んでも終わらない差別と偏見があります。

また、「宣教師になる、牧師になる」と目を輝かせていた女性たちのことを私は覚えていません。女性たちは、どこへ？組織として容認し続けた「女性差別」があります。

私たち教会の「当たり前」から発せられる言葉は、人を生かしているのでしょうか。誰かを排除する教会、後の平穏、それは神の平和ですか？教会の入り口で、「ようこそ教会へ」という挨拶の後に、個人情報調査？「教会は何を知りたい？何に使う？」一方的な対応、こうあるべきの押し付けは危険です。奉仕に性別の偏りはありませんか。話し合いは大事にされていますか。牧師やリーダーのみの決断に頼らず、メンバーに共有や平等がありますか。教会の役割は？どんな教会を望みますか。キリストに倣う教会作り、違いは面倒ではなく、全体のプラスに。「すべての人が神さまに招かれているところ、それが教会ではないか」存在を認め合う教会に向け、(I コリ 8 : 2) 自ら学び続ける大切さを思います。教会が、人を選び分ける「苛酷な門」とならず、いのちの豊かさを知る「喜びの門」となるように…。

追記：西南神学部入学に教会推薦状と牧師・伝道者への決意表明は必須でした。教会の祈りに支えられ神学校へ、学びの場は安全でした。ところが、卒業前に「女性差別」の嵐が！「そのうち、わかるよ」と笑みを浮かべていた先輩神学生…。夫が牧師だから？「牧師になるな」との発言が複数の男性牧師から。1年間の就活(奉仕教会)を経て、私は今治に牧師として赴任。信頼出来る先輩方もおられる一方、初対面の牧師たちや部下から見下発言、「コイツが牧師か」、初対面なのに「お前のことはよく知っている」、「どうせお前は…」。夫婦ともに牧師であることを笑われ、出版物に敢えて「牧師夫人」と記す方も、教会の方が怒りゲラを修正し印刷は免れました。ジャニーズ記者会見で思い出した「あなたにはあてません」という議長の言葉。

女性差別・人権侵害・権威主義・各個教会主義の乗り越え、神の召しの忘却。「こんなことは、世に溢れている」「言葉だけなら、大したことはない？」差別は、人を殺すのです。代わる代わる、執拗に繰り返される差別という暴力。私たち連盟の「宣教」は、変わりましたか。偽預言者、偽教師に陥らぬよう、キリストに倣い、キリストに在って生きる教会でありたいです。

## 「福岡地方連語合ハラスメント防止・啓発・情報窓口」の活動について

久保 久仁子

この「窓口」(略)については、2022年度福岡地方連合定期総会において窓口設置案が総務委員会から提案され了承されました。

福岡連合では、2022年1月に伝道委員会・総務委員会共催で西南学院大学神学部教授の才藤千津子さんをお迎えし、「ハラスメント入門講座」を開催したことがきっかけとなりました。地方連合内の活動において、ハラスメントを防止して被害者を出さないこと、誰もが安心して教会生活および連合活動を行えるよう、被害者にも加害者にも必要かつ有益となる学習の機会と情報に触れることができるように整え、お互いの「感覚のアップデート」を目指すことが「窓口」設置の目的です。

実際の活動は、研修会の実施や資料の紹介、連盟ハラスメント対策委員会・対策グループへの協力依頼、ハラスメント発生時、原則として直接は担当せず、連盟ハラスメント委員会・相談グループ等適切な組織につなげることとしています。被害者への寄り添いは行うこと、被害者にとって有益な情報リソース(社会資源とネットワーク)を整えることなども挙げられます。

委員は、現在、連合内諸教会から4人がメンバーとなり、その他1人は総務委員が陪席しています。

これまでの活動内容としては、2022年9月に、これってハラスメント?とゆるく語り合うカフェ(略称「これハラカフェ」対面で8人参加)を開催し、『女性は台所、男性は役員?』といった意識はないか等、例を挙げて自由に話しました。2023年1月に「ハラスメント研修会」(オンライン約30人参加)を開催し、講師の連盟ハラスメント対策委員会委員長の城倉由布子さんからハラスメントの基礎知識を教えてくださいました。担当者ミーティング(オンラインで6回実施)では、研修会等の準備や振り返りを主に行ってきました。2023年度も2回のカフェと研修会を1回開催する計画です。また、読書会の開催や啓発カード等の制作も検討しています。今年6/17開催のこれハラカフェ(12人の出席)では、教会にある「職分」について話しました。2022年度は立ち上げの年として「窓口」の形を作り、2023年度は定着と拡がりを期待しています。

個人的には、ハラスメントについて学ぶにつれ、自分の今の生活の中で「心がざわざわするようなこと」が、「ここから始まっているのかな」と感じる事が以前より多くなった気がします。援助職に携わり、実際に被害を受けたことにより心の病気になられた方々と接してきた経験を振り返りつつ、時に自分もハラスメントを起こし得る者として、他者との関係のあり方について、少しずつでも「感覚のアップデート」ができればと日々感じています。

委員や参加者とともにこの輪を拡げることに関わらせていただき、共に学ぶ機会を与えられ感謝しています。

(くぼ くにこ/福岡西部バプテスト教会)

9月11日(月)平尾バプテスト教会大名クロスガーデンで「性差別問題特別委員会&福岡地方連合ハラスメント防止・啓発・情報窓口」公開学習会が開催され40名の参加だった。私たちが、社会や教会の中で生きてきて今まで「当たり前」としてきたことを今一度立ち止まって考えていく問題提起があり、その後4グループに分かれて自由に語り合い分かち合った。

はじめに、性差別問題特別委員の今井朋恵さんが、ご自身の体験から語ってくださった。「献身の思いが与えられ神学部で学んだが、牧師になる道は閉ざされていた。『宣教師になる、牧師になる』と神さまからの召命に目を輝かせていた女性たちは...そうなってはいない。なぜなら、当時の連盟は組織として女性を差別し、『牧師になるな』『牧師夫人になれ』『波風立てるな』『夫婦牧師はままと』と全くの男尊女卑だった。祈って一緒に考えようと言ってくれる人はいなかった」ということだった。私も当時は、牧師は男性と、当たり前だと思っていたので、女性は牧師夫人ということは当たり前のことだと思っていた。しかし今振り返ると、それは、(自分も女性でありながら)女性差別を容認し加担していたと言わざるを得ないと思った。そして今回思ったことは、性別役割分業としての女性差別、男尊女卑に伴うハラスメントに女性たちは同じキリスト者として傷つき痛みくやしさを抱えることになったのではないかと、ということだった。

また、本来「教会は人によってなったものではなく神によってなったものであって、すべての人が神さまに招かれていて互いの存在を認め合うのが教会である」のに、私たちは教会の入り口で「ようこそ、教会へ」と来会者を歓迎しながらも、対応において、世の中に根強く残っている常識、価値感を(そんなつもりはなく・無意識に)押しつけてはいないか、そのことによって人を排除し傷つけてはいないか、ということを手側を立てて問い直すことを教えられた。長い年月をかけて心と体に刷り込まれてきた当たり前(そうあるべき・そうすべき)は、今、多様性を認めず、人々を苦しめていることを、私たちはこのような学習会を通して学ぶことができる。気づくことができる。教会で分かち合うことができる。そして、すべての人たちと共に生きていくことができるようにと祈っていくことができる。差別は私たちが思いもしないところで、いろいろな形で潜んでいる。学び続けていきたい。

(いづみ みちこ／古賀バプテスト教会)

### 編集後記：

今年開催されたサッカー女子W杯で、LGBTQ・性的マイノリティーを公表した選手は過去最多の95人に上った。これを受けFIFAは、ジェンダー平等など各メッセージを記した8つの腕章の着用を許可した。この決定の背景には、欧州を中心に集まった10名ほどの各チームのキャプテンらとプロサッカー選手の国際的な労働組合FIFPROの粘り強い交渉があった。事実、前年に開催された男子W杯では、開催国カタールのLGBTQへの差別や同性愛を禁止する法律に抗議した欧州7チームが多様性尊重の支持を示す「ONE LOVE」と書かれた虹色の腕章を着用しようとしたところFIFAに却下された経緯がある。一方、今大会にFIFAが提案した腕章にはLGBTQの権利への直接的なメッセージはなかった。神が尊ぶすべての“いのち”が大切にされる世界に向かって、粘り強く歩を進めたい。(よしだなおし／性差別問題特別委員会委員 室蘭バプテスト・キリスト教会)